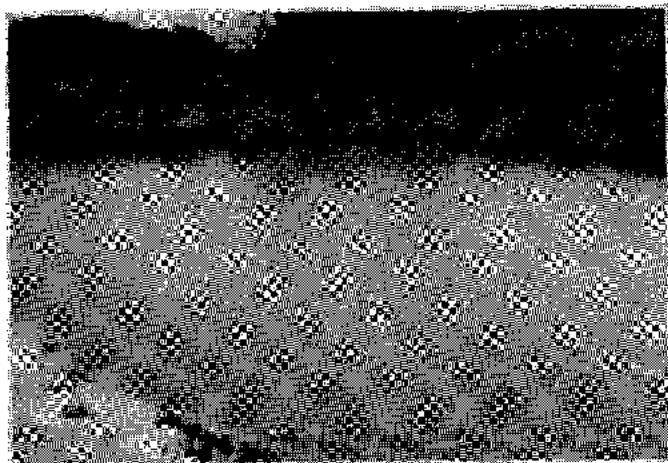




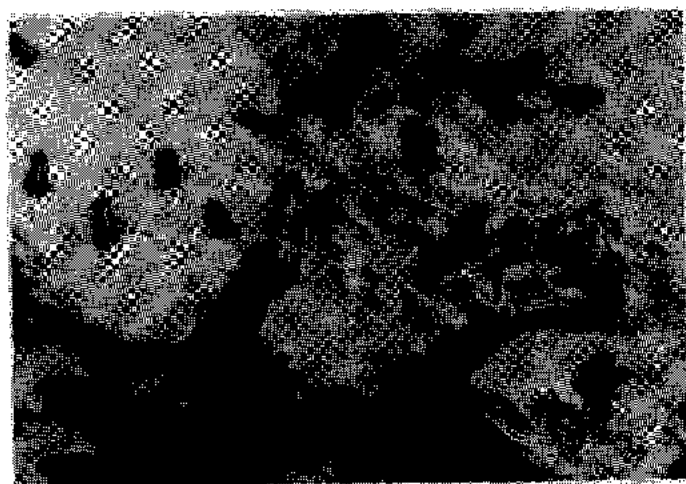
大東神社に近接する小さな池



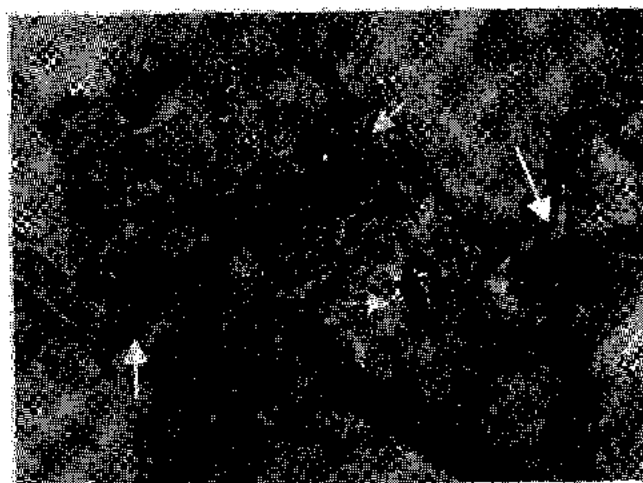
オオヒキガエルとミヤコヒキガエル（抱接）



水辺の幼生群



変態幼体の群



変態幼体（拡大図）

図5-3 大東神社に近接する小さな池

調査日時：平成13年1月26日

天候：曇り、微風、24.6℃（水温21℃）

観察個体数：ミヤコヒキガエル 成体13個、変態直後の幼体及び幼生多数
ミヤコヒキガエル（左後肢欠損1個体）（図5-4、矢印）

調査(6)：大東神社に近接する小さな池（直径約8m）（図5-3）

調査日時：平成13年1月25日

天候：晴、微風、24℃（水温20.8℃）

観察個体数：ミヤコヒキガエル 33個体（抱接2対）
オオヒキガエル 5個体

[考察]

南大東島における本年度の調査は昨年度より1週間早い時期、1月末に行った。従って、時期的には殆ど同じである。昨年度の調査（大東神社境内の池）では、オオヒキガエル3個体とミヤコヒキガエル53個体、合計56個体を観察したのに対し、本年度の調査では、オオヒキガエル8個体、ミヤコヒキガエル280個体を観察した。数字では生息数が増加したように見えるが、必ずしもそうではないと思われる。何故ならば、オオヒキガエルやミヤコヒキガエルが成体になるには数年を要するからである。観察数が増加した原因として、気温が昨年に比べて3℃高かったこと、更に観察後、夜中に雨が降ったため、カエルが現れる条件が揃ったことが挙げられる。ここ1年間に島内では大きな工事や台風による被害もなく環境が殆ど変化しなかったこと、昨年及び今年の野外調査、並びに島民との聞き取り調査から判断して、南大東島のミヤコヒキガエルの棲息数が急増したとは考えにくい。オオヒキガエルについては、昨年度と同様、個体数がミヤコヒキガエルのそれに比べるとかなり少ないことから、オオヒキガエルの急増はないと思われる。しかし、今年の調査でオオヒキガエルの亜成体2個体が観察されたことから、この種が急滅すること考えられない。ただ、今回の調査でオオヒキガエルの奇形後肢の亜成体（図5-4）が1匹見つかったことは、南大東島においても、徐々に環境汚染が広がっている可能性がある。言うまでもなく、他の要因による突然変異の可能性もあり、今後も継続して調査を行う必要があると判断した。

②宮古島

宮古島は面積225.86km²で伊良部島と同緯度にあり、沖縄本島から南西に約290kmの位置にある（図5-1）。気候は亜熱帯の海洋性気候（年平均気温、約23℃）で、1年を通じて温暖である。年間平均降水量は2247mm、降水日数が148日以上で雨が多い。周囲約102.9kmの島は平坦で低い台地状を呈しており、標高113mである。島にはほとんど池がなく、穴を掘った溜め池に雨水を作物用に蓄えている。飲料水は自然雨と海水を淡水に換えて使用している。島の人口は55,735人（平成7年国勢調査）でサトウキビの栽培や観光が主な産業である。この島には南大東島とは異なり、両生類及び爬虫類の固有種がいる。沖縄群島の有名な爬虫類であるハブは宮古島にはいないが、無毒のヘビ（アオカナヘビ、サキシママダラ、ヒメヘビなど）が生息していてカエルの天敵となっている。両生類ではヒメアマガエル、サキシマヌマガエル、それに宮古固有亜種のミヤコヒキガエルがいる。毒蛇がいない島であること、また、ミヤコヒキガエルの生息状態を他の島と比較・検討する必要があるので、この島を選んだ。